様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ５ 月 ２１ 日現在

機関番号：１０１０１
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ１２８６３

研究課題名（和文）聖像を展示する――ソビエト政権成立期における展示空間の再編過程

研究課題名（英文）Exhibiting Icons: Study of the process of reconstruction of exhibit space in the formation of Soviet Russia.

研究代表者
宇佐見　森吉（USAMI, SHINKICHI）

北海道大学・メディア・コミュニケーション研究院・教授

研究者番号：２０２０３５０７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,900,000円

研究成果の概要（和文）：ソビエト政権樹立期における文化政策、とりわけ帝政末期の古聖像「発見」を契機とする聖像の調査研究、修復展示に着目し、旧体制下で形成された美術コレクションの委譲、聖像や聖遺骸など礼拝の対象となる教会財産の接収、新規の博物館開設等を通じて行われた文化財保護政策、それにともなう新たな展示空間の形成過程について資料を収集し、文献調査を行なった。調査結果は、関連する事象を年譜に整理し、報告書にまとめて刊行した。

研究成果の概要（英文）：Our purpose of the investigation was to define characteristics of public space of exhibitions in the process of reconstruction in the Revolutionary Russia. The “Rediscovery” of Old Russian Icons in late Imperial Russia, the study and preservation of Icons as Medieval Russian Art and the construction of new cultural politics in post-Revolutionary Russia are its symbolic examples. As a result of the survey we published a bulletin with a timetable of historical and cultural fact.

研究分野：人文学

キーワード：ロシア　ソビエト　聖像　教会　博物館　展示　文化財　霊廟

１．研究開始当初の背景

ソビエト政権樹立後、両首都の美術館所蔵物となった著名コレクションの多くは、19世紀後半から20世紀初頭にかけて形成されている。私邸に40万点に及ぶ蒐集品を所蔵していたП.シチューキンは1905年、収集品をモスクワ市に遺贈する意志を表明している。一方 、C.シチューキンは1917年11月、クレムリン宮殿内に国立美術館を創設し、モスクワの五大個人コレクションを収蔵することを構想し、労働者代表ソビエト芸術啓蒙部に働きかけた。こうしたコレクションの形成と委譲、あるいは接収の過程が、革命後の美術館の創設と深く関わっている。H.ドゥーモワ『モスクワのメセナたち』（1992）を始めとして、ロシアの蒐集家に関する研究は少なくない。本研究はとりわけH. セミョーノワの研究『セルゲイ・シチューキンの生涯と蒐集品』（2002）から多くの示唆を得ている。

一方、革命後接収された教会財産の中にも美術品として扱われたものは少なくない。1918年1月、ソヴィエト政府が採択した「教会の国家からの分離および学校の教会からの分離に関する布告」により教会財産は国有化され、古美術品は教育人民委員部の管理下に置かれた。至聖三者セルギイ大修道院の教会財産をめぐる教育人民委員部博物館問題および古美術古物保護問題関連モスクワ部会の活動については、典院アンドロニク『至聖三者セルギー修道院の閉鎖とラドネジの聖セルギーの遺骸の運命1918－1946』（2008）に詳しい。また、И. グラバーリが主導する全ロシア修復委員会（ロシアにおける中世絵画遺産保存修復委員会）の活動についても、ロスラフスキイ『イーゴリ・グラバーリと修復』(2004)以来、関心が高まっている。一方、ソビエト政府による聖遺骸開封を通じた反宗教宣伝の事例を調査したグリーン『綺羅星のような肉体–ロシア正教における聖人と聖遺骸』（2010）、カシェヴァーロフ『ソヴィエト政権と正教聖人の聖遺骸の運命』(2013)等も、教会における真正性付与の問題を考察する上で欠かせない文献となっている。また、本研究はソビエト政権樹立期の教会と美術をめぐる筆者の一連の研究「20世紀初頭のロシアにおける『古聖像の発見』とその文化的意義について」（平成21年度～23年度）「教会閉鎖と霊廟開設–ソビエト政権成立期における公共空間の再編過程に関する研究」（平成24年度～26年度）の成果の蓄積の上に成り立っている。

２．研究の目的

本研究の目的は、ソビエト政権樹立期における文化政策、とりわけ旧体制下で形成された美術コレクションの委譲、中世美術を主とする教会財産の接収、新規の博物館開設等を通じて行われた文化財保護政策、それにともなう新たな展示空間の形成過程について検討を行なうことにある。ソビエト政権樹立期の教会閉鎖から博物館開設に至る過程は、ロシア文化における真正性の付与という機能の担い手が教会から博物館に移行する過程として捉えることが出来る。本研究の全体構想は、そうした事例の考察を通じて、ソビエト政権成立期における展示空間の再編過程の特質を文化研究の立場から明らかにすることにある。

３．研究の方法

ロシアの主要なミュージアムの歴史についてはすでに多数の研究がある。本研究はそれらの学術成果を踏まえて進めていくものの、個別の美術館、博物館に関する歴史研究ではない。むしろ、本研究は聖像という事例を通じて、教会や美術館における展示の機構に注目することに特色がある。ソビエト政権の樹立によって美術館はどう変わったか、何が真正性を剥奪され、何に真正性が付与されたのかが問題となる。美術館は初期のソビエト社会にいかなる展示空間を出現させたか。聖像の展示という事例を通じて、近代ロシア社会のガラス越しに浮かび上がってくるのものは何か。これらの問題に答えていくことが本研究の課題である。

それゆえ、本研究で特に注目したのは以下の三点である。

(1)　文化の記憶装置としてのミュージアムに注目する。

ソビエト政権樹立後、文化政策の領域で最初に指摘されたことは、旧体制下の支配者層、富裕層が所有する美術品、宝物や古物の国外流失を防ぎ、国家の威信をかけて文化遺産の国有化を進めていくことであった。ロシア革命後、再編されたロシアのミュージアムはこ

うして遺贈、接収、略奪された宝物を文化財として保存修復し、調査研究し、展示することをミッションとするメディアとなる。

流失を逃れた文化財の中には明暗の別れたものが少なくない。教会の閉鎖と教会財産の接収を通じて、旧体制下の聖像や聖遺物に付与されていた礼拝的価値は剥奪され、芸術的価値が希薄であると判断された近代聖像の多くが廃棄されたことが近年明らかになっている。廃棄を逃れた聖像・聖遺物は、民族の誇るべき真正な文化遺産として「発掘」され「発見」された。ミュージアムはこうした文化の記憶装置として古美術古物を「発見」し、ソビエト文化の模範として展示空間に編入していったのである。ソビエト政権の樹立期にミュージアムの創設が緊急の話題となった背景にはこうした文化の考古学的「発見」をめぐる政治学がある。ロシアにおけるこれまでの美術館をめぐる歴史研究にはこうしたメディアの視点からの考察が立ち遅れている。

(2)　ミュージアムは忘却の装置ともなりうる。

ミュージアムは二重の意味で忘却の装置ともなりうる。文化の記憶装置として、記憶されるべきものと忘却にまかされるべきものとの選別が行われることによって、記憶すべきものはそれに値する価値をもったものとして再「発見」されるが、忘却にまかされるべきものは「発見」されることなく廃棄される。ベーリクの研究『ペシェホーノフ工房の聖像画遺産』（2011）が指摘している通り、古聖像のように美術品として扱われなかった近代聖像は大量に廃棄された可能性がある。

近年、各地で刊行されている教会閉鎖の歴史文献はこうした隠れた文化破壊を裏付ける資料となっている。一方、文化財として美術館や博物館の所蔵物となった古美術もまた、本来存在した教会とは異なる空間に展示されることになり、ミュージアムの展示空間は本来置かれていた文脈を忘却させる装置として機能する。新政権下の教会財産接収の結果、美術館に搬入された文化財の多くもまた同じ運命を享受した。これまでのロシアにおける古美術研究はこうした忘却装置という視点からミュージアムについて考察する研究がまだ手薄である。

(3)　ミュージアムの役割をめぐる論争に注目する。

ソビエト政権樹立期の美術館が古美術古物の「発見」を通じて新体制に組み込まれていく一方で、美術館という近代的な制度それ自体に異議を唱える思想家や前衛芸術家集団が登場したこともこの時期の特徴である。グロイスの論文「ミュージアムとの戦い」（2002）が明らかにしているように、「美の神殿」としてのミュージアムは、群衆の集う「フォーラム」に重きを置くアヴァンギャルドの美学と相いれない。むしろ前衛芸術家たちはミュージアムの外で革命という歴史的転換を記憶する方法を構想したと言ってもよいだろう。一方、フョードロフのように、ミュージアムを全人類の救済というユートピア的理念と結びつけて考えた思想家もいる。死すべき人間の痕跡を保全する記憶装置としてのミュージアム。グロイスが指摘するように、フョードロフの思索は共産主義社会の実現を夢見る革命家たちの思索の中にも流れ込んでいる。こうしたミュージアムの役割をめぐる論争、展示スペース獲得のための主導権争い、展示空間争奪戦の跡をたどることによって、ミュージアムという記憶装置が未来を志向してやまない当時の芸術家や思想家たちの心をどのような形で捉えていたかを明らかにすることも重要だろう。

ソビエト文化研究の近年の課題のひとつはスターリニズムのメディアと表象に焦点を当てることにあった。本研究はソビエトにおけるミュージアムというメディアの研究でありながら、その軸足は旧体制と新体制の移行期に置いている。このことは本研究の関心がなによりも、ロシア革命を挟んだロシア文化の接続の問題にあるためである。フランス革命の時代がそうであるように、ミュージアムは転換期の落とし子である。ミュージアムはその誕生からしてつねに、切断の危機にさらされている文化の接続の問題を浮かび上がらせる。展示空間の形成を研究の対象とすることによって、いわば「ガラス越し」に浮かび上がってくるのは、「聖像の発見」に湧いた帝政ロシア末期のロシア社会と、「教会閉鎖」から「霊廟開設」に至るロシア革命以後の新時代のソビエト社会における文化の切断と接続の道筋である。

以上の諸点に着目し、本研究は以下の計

画に沿って進めた。
ソビエト政権樹立期の文化財保護について、①文化財の蒐集②文化財の調査③文化財の修復保存④文化財の展示の四つの観点から事例調査を行なう。
初年度（平成２７年度）は主に「文化財の蒐集」「文化財の調査」に関する事例を調査する。また、年度内にロシア国内で資料調査を行ない、文献を収集する。
第 2 年目（平成 28 年度）は主として「文化財の修復保存」「文化財の展示」に関する資料調査を行なうほか、引き続き初年度に収集した文献資料の分析を行なう。
最終年度（平成 29 年度）には引き続き前年度に収集した資料の分析を行ない、後半には最終的なとりまとめを行なう。

４．研究成果

本研究の骨子は「聖像を展示する」という題目に集約されている。聖像という観点からロシアの展示空間の形成過程を考察することが本研究の課題である。本研究が対象とするのは1881年から1937年までの期間とした。起点とした1881年は、近代ロシアにおける古美術と民芸への関心の高まりを背景として、モスクワ近郊の村アブラムツェヴォに美術家サークルが生まれた年である。終点とした1937年は、本研究の対象とする聖像と展示空間に関わりのある人物たちの多くが粛清されたことで知られる年である。この二つの年を挟んで、「教会閉鎖」と「聖遺骸開封」によって特徴づけられる1917年のボリシェヴィキによる「革命」がある。またその前後に「聖像の発見」と「ロマノフ王朝三百年祭」に湧いた1913年があり、「美術館再編」と「霊廟開設」に邁進する1920年代がある。

本研究が「聖像」を主題としながら、聖像の展示を媒介する機構に注目するのは、上述のような社会的背景と文化的文脈を考慮しつつ「展示空間」について考察を進めていくという狙いがある。それゆえ、本研究では「聖像」「聖遺骸」のみならず「指導者の遺骸」についても論じる必要があるし、「中世美術」「民俗美術」のみならず、「前衛美術」や「宣伝芸術」にも目を配る必要がある。さらには「教会」や「修道院」のみならず、「美術館」や「郷土資料館」のような「博物館」、政治的事件の「記念碑」や「霊廟」にも注目した。「展示空間」とはこれらの展示物や展示室の争奪をめぐって展開される闘争の媒体に他ならない。それゆえ、「聖像を展示する」ということは、ロシア社会の変貌を「ガラス越しに見る」と言い換えてもよいだろう。一方、「ガラス越しのロシア」とは、考古学から別れて美術史学が専門領域として確立されていく過程でもある。本研究では聖像の修復展示が考古学的発掘と語彙を共有することに注目し、この時期の展示空間の形成過程の特質を明らかにすることを試みた。本書に収録した年表から「イコンの発見」に関するコラム（1905年の項参照）を引く。

「イコンの発見」(Открытие иконы）は考古学的発掘を通じてもたらされる。直接的には、聖像の表面を覆うオークラドを除去し、画面の汚れを落とし、後世の加筆をはがすという「洗浄」(очистка）の作業を通じて、聖像の古層に埋没した図像を「発掘」(вскрытие)し、「修復保存」(реставрация и охранение）する。聖像の「考古学的発見」は、後に「ロシア・ルネサンス」と呼ばれる「文化復興」の象徴的事件となる。「イコンの発見」は、ピョートル以前の精神文化の再興という理念の拠り所となる。「発見」されたイコンは博物館の所蔵となり、観衆はイコンを博物館のガラス越しに見る。

教会による聖人の列聖も「発掘」(вскрытие）から始まる。遺体を掘り起こし、遺骸を検分し、聖人として列聖する。この過程は、教会にとって代わる政治権力によっても、修復保存の科学に基づいて反復される。

政治権力による反宗教宣伝の過程も、聖遺骸の「開封」(вскрытие)から始まる。聖人の柩の封印をはがし、遺骸を「点検」(проверка)し、医学的所見に基づき遺骸の不朽性を科学的に否定する。「開封」の模様は映像によって記録され、政治宣伝に利用される。開封された柩にはガラスが嵌められ、市民に公開される。教会を訪れた市民は聖遺骸をガラス越しに見る。再び封印

されて博物館の展示スペースに送られる。
　指導者の記憶を不滅のものとする政治プロセスも、多くの政治宣伝と並んで、遺体の「解剖」(вскрытие) から始まる。遺体を解剖し、臓器は研究所で保存研究される。遺体は永久保存のため科学的処理が施され修復保存される。指導者の記憶を不滅にする、という政治目的に奉仕するために、遺体は霊廟という展示空間に安置される。霊廟の柩に安置された遺体を人々はガラス越しに見る。

「聖像を展示する」とはロシアを「ガラス越しに」見ることに他ならない。
そこから浮かび上がって来ることは、「ロシア革命」前後の文化の断絶と接続の問題である。近代のロシア文化を宗教というフレームを通して「ガラス越しに」見るならば、ソヴィエト政権の樹立が正教文化の断絶をもたらしたことは疑いようのない事実である。一方、ロシア文化を美術史や考古学のフレームを通して見るならば、帝政末期に見出された古聖像の価値は、ロシア革命後にいっそう高まったとも言えるだろう。革命後、古聖像の価値はいささかも揺るぐことはなく、むしろソビエト政権は古聖像の発掘を帝政期以上に体系的に展開していったのである。それゆえ、本研究では古聖像の発掘、古美術の学術調査、文化財保護、文化財修復といった聖像の展示に関わる事象のみならず、聖遺骸を安置する聖堂や指導者の遺体保存に見られる文化の接続に関わる事象にも注目した。さらには、それらの事象に関連するキーパーソンの足跡をたどることも欠かせないと考えた。ネステロフ、フロレンスキイ、ドゥルイリン、シチューキン、ゴンチャローワ、マレーヴィチ、グラバーリ、プーニン、シチューセフ、さらにはニコライ2世やエリザヴェータ・フョードロヴナ、チーホン、聖セルギイ、レーニンといった各界の人物たち--美術家、宗教者、哲学者、文学者、蒐集家、美術史学者、美術批評家、建築家、皇族、総主教、聖人、政治家--が帝政末期からソヴィエト政権初期の展示空間の形成にどのような役割を果たしたかを具体的に明らかにしようとした。さらにはこれらの著名な人物たちのみならず、展示物を「ガラス越し」に覗き込んだロシアの大衆にも大いに注目した。帝政末期からソヴィエト政権樹立期にかけてのロシアの展示空間はこれらの無数の人物たちのまなざしによって生み出された空間である。
　本研究の全体構想はこうした近代ロシア社会のまなざしが生み出す展示空間の形成過程をより多面的な視点からたどることにある。今回の研究期間内に明らかにしえたことは、いわばそのための序章にすぎず、いくつかの重要な主題の提示にとどまっている。とりわけ革命後の前衛美術との関連から前衛美術家たちがめざした新たな展示空間の特質について考察するという課題は今回の期間内にはかならずしも果たせないで終わったことが悔やまれる。一方、展示空間の研究は21世紀に入り急激な進展を見せている。こうした動向に触れたことは今回の研究をさらに今後継続していく大きな励みとなるだろう。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　0　件）

〔学会発表〕（計　0　件）

〔図書〕（計　1　件）
宇佐見森吉、聖像を展示する――ソビエト政権成立期における展示空間の再編過程　平成 27 年度～平成 29 年度科学研究費補助金挑戦的萌芽研究（課題番号 15K12863）研究成果報告書、北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院、2018 年、126 ページ

〔産業財産権〕

○出願状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
宇佐見　森吉（USAMI　SHINKICHI）
北海道大学・大学院メディア・コミュニケーション研究院・教授
研究者番号：20203507

(2)研究分担者
(　　)

研究者番号：

(3)連携研究者
(　　)

研究者番号：

(4)研究協力者
(　　)